

第三回 『小夜衣』

【現代語訳】

「ここはどこか」とお供の人々にお聞きになると、（お供の人が）「雲林院と申すところでございます」と申し上げるので、（宮の）お耳に残って、「宰相が通う所であるか」と思い、「この頃は（宰相は）ここにいと聞いたが、（宰相の通う姫君のお住まいは）どこであろうか」と、知りたくお思いになって、御車を止めてあたりを見渡していらつしやると、どこに咲いているのも同じ卯の花とはいいながら、卯の花の垣根が続いているのも、卯の花の名所である玉川を見るような心地がして、ほととぎすの初音を待つのもちっとも苦にならないと興味深く思われなかって、夕暮れ時なので、静かに葦垣の隙間から、格子などが見えるのをのぞきなざると、こちら側は仏前と見えて、閤伽棚がささやかにあり、妻戸や格子なども開けやって櫛の花が青々とした状態で散っていて、花をお供えして、からからと鳴る様子も、仏事にいそしむことで、現世でも充実感があり、来世にもまたさらに大変頼もしいことであるよ。仏道の方面は気にかかることなので、（宮は）この庵での生活をうらやましくご覧になっている。思うようにならない世の中で、このように仏事をつとめて暮らしたく、御目が留まってご覧になっていると、女の童の姿もたくさん見える中に、例の宰相の所にいる女の童もいるので、「（姫君がいるのは）ここであろうか」とお思いになるので、お供である兵衛督という者をお呼びになって、「宰相の君はここにいますでしょうか」と、対面するつもりであることを申し上げなされた。（宰相の君は）驚いて、「どうしましょうか。宮が、ここまで探してお越しになったのです。恐れ多いことでございます」といって、大あわてで出迎えに出た。仏様の傍らの南面の部屋に御敷物などを整えて、（宮を）お入れ申し上げる。

（宮は）ほほ笑みなざって、「このほど探し申し上げているところ、この辺りに（あなたが）いらつしやるのを聞いて、こんな所まで入ってきています私の気持ちをお分かりになってください」などとおっしゃるので、（宰相は）「本当に、かたじけのうございます。ここまで探しにいらつしやるあなたのお気持ちには、いたたまれなく感じます。老いた尼上が、先行きももう長くはないようですので、（最期を）看取りましょうというので、こうしてこもって（看病しております）」などと申し上げると、「（尼上が）そのようにいらつしやるようなことは、いたわしいことでございます。尼上のご様子もお聞きしようと思つて、わざわざやってきましたのに」などとおっしゃるので、（宰相は）中に入って、「このような（宮の）お言葉です」と（尼上に）申し上げなざると、「そのような者がいると（宮の）お耳に入つて、人生の終わりに、このようなすばらしいお恵みをいただけることは、長生きします命のことも今は嬉しく、この現世での名譽

と思います。本来ならば、人を介さず直接お礼を申しあげねばなりません、このように弱っておりますゆえ（ご容赦くださいませ）」などと、消え入りそうな声で申し上げているのも、とても望ましいと（宮は）お聞きになっている。

（庵にいる）人々が覗いて拝見すると、月も華やかに出た夕月夜に、（宮の）振る舞いなさっている様子は、例えようもないほど素晴らしい。山の端より月光が輝き出たような（宮の）ご様子は、非常に立派で、艶も色も溢れんばかりのお着物に、直衣がちよっと重なっている色合いも、どこで加わっている清らかな美しさであろうか、この世の人が染め出したようにも見えず、普通の色とは見えない様子で、模様も大変立派である。それほどでもない男性さえ見慣れていない心地であるのに、「世の中にはこのような人もいらっしやるのだなあ」と夢中になって誉めそやしている。本当に、（宮を）姫君に並べたく、頬が緩んでいる。宮は、この場所の様子などをご覧になると、普段見慣れているところとは様子が違ってご覧になる。人が少なくしんみりとして、このような所に、悩みがちであるような人（姫君）が住んでいるような心細さなどを、しみじみと実感しなさって、むやみに物悲しく、お袖も（涙で）濡らしなさって、宰相にも、「くれぐれも私のことを効果があるように取り成し申し上げなさってくれ」などと語らってお帰りなされるのを、（庵の）人々も名残多く思われる。